

第1回 前立腺肥大症の症状

「排尿の話」

埼玉社会保険病院泌尿器科部長
東京大学医学部非常勤講師

石井 泰憲

「おしっこ」「尿」についてのイメージを聞いてみると、たぶん、大便と並んで汚いもの、臭いもので、恥ずかしくて話題にしにくいと答える患者さんが多いと思います。

しかし、「尿」は、血液を腎臓が濾過したもので、血液の一部からつくられたものです。ですから細菌の混入もなく、元来は清潔で、きれいなものなのです。ニオイについても、イヌなどの他の動物では自分の縄張りを誇示するために必要なものなのですが、どうしたわけか人間にとっては嫌いなニオイになっています。

ところで、生きるための体液を調整する大切な働きをする尿ですが、一般的には、尿が出にくい、尿が漏れるなどの排尿の異常があっても、恥ずかしがって、他人への相談、医療機関などの受診は、なかなかしづらいものがあるようです。

そこでこのたび、これから高齢化社会を迎えると増加すると言われている「排尿の病気」についてお話したいと思います。今回は前立腺肥大症についてです(図1)。

女性は子宮を持っていますが、これに相応して男性が持っているのが前立腺です。前立腺の働きは精囊とともに、精液の一部の前立腺液を分泌することですが(最初に出るのが前立腺液で後のほうが精囊液です)、前立腺液がなくても精子は受精可能ですし、他には亜鉛による殺菌作用があるくらいで摘出しても支障がないので、重要な役割はあまり果たしてないと考えられています。しかし、前立腺は膀胱のすぐ下のところで尿道を取り囲む構造になっているので、前立腺が腫大すると、尿道を圧迫して尿の通りが悪くなり、さまざまな症状を起こします。正常な前立腺はクルミ大の大きさをしていますが、50歳を過ぎる頃より前立腺腺腫の腫大は始まり、個人差はありますが、年をとるにつれて腫大する人が多くなります。前立腺が腫大する

原因に、前立腺肥大症と前立腺癌の2つがあります。前立腺は内腺と外腺に分けられ、ミカンに例えると実と皮の関係になります。実が内腺で皮が外腺です(図2)。前立腺肥大症は、内腺より発生し良性のもので、女性の子宮筋腫にあたります。前立腺癌は、外腺が悪性化したもので、子宮癌に相当するものです。

前立腺肥大症の原因は、50歳頃から男性ホルモンの生産がだんだん少なくなるのに対して、女性ホルモン(男性でも少量の女性ホルモン分泌があります)の量はあまり変わらず、このバランスが崩れるために前立腺の中に腺腫ができるためとされ(腺腫形成には男性ホルモンは重要な働きをしていますが)、60歳代の約70%に前立腺肥大症が発見されます。このうち治療を要するのは3分の1程度といわれています。

前立腺肥大症の腺腫は腫大が大きいほど、一般的に尿の出が悪くなります。ところが、前立腺の大きさと排尿困難の度合いとは必ずしも比例しないことがあります。腺腫が圧迫する尿道の場所によっても違いますし、形にもよります。前立腺の外腺からなる被膜が伸展しないと、内腺の腺腫腫大がそんなに強くなくても、内圧が高くなり、ゴム風船と同じ原理で球形になります。前立腺肥大症は、大きくなくても、球形に近づくほど尿道への圧迫も増し、排尿困難が強くなるともいわれています(図3)。直腸診、尿道造影、エコー検査などで前立腺の大きさ、形態を知る必要があります。

前立腺の筋肉(平滑筋)は交感神経の支配を受け、収縮して尿道を締めつけています。この交感神経の受容体(α -1レセプター)が前立腺肥大症では増加するので、尿道が締められ、尿道

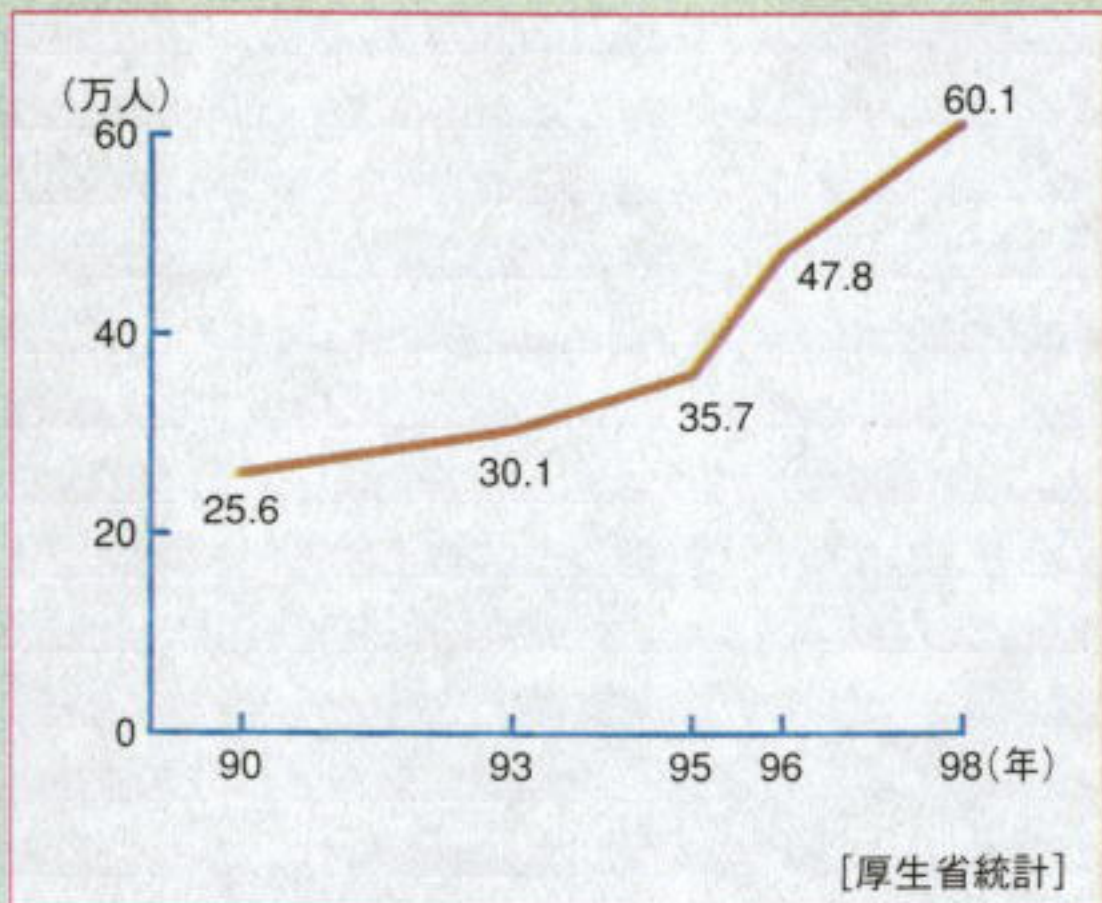


図1 前立腺肥大症による受診患者の推移

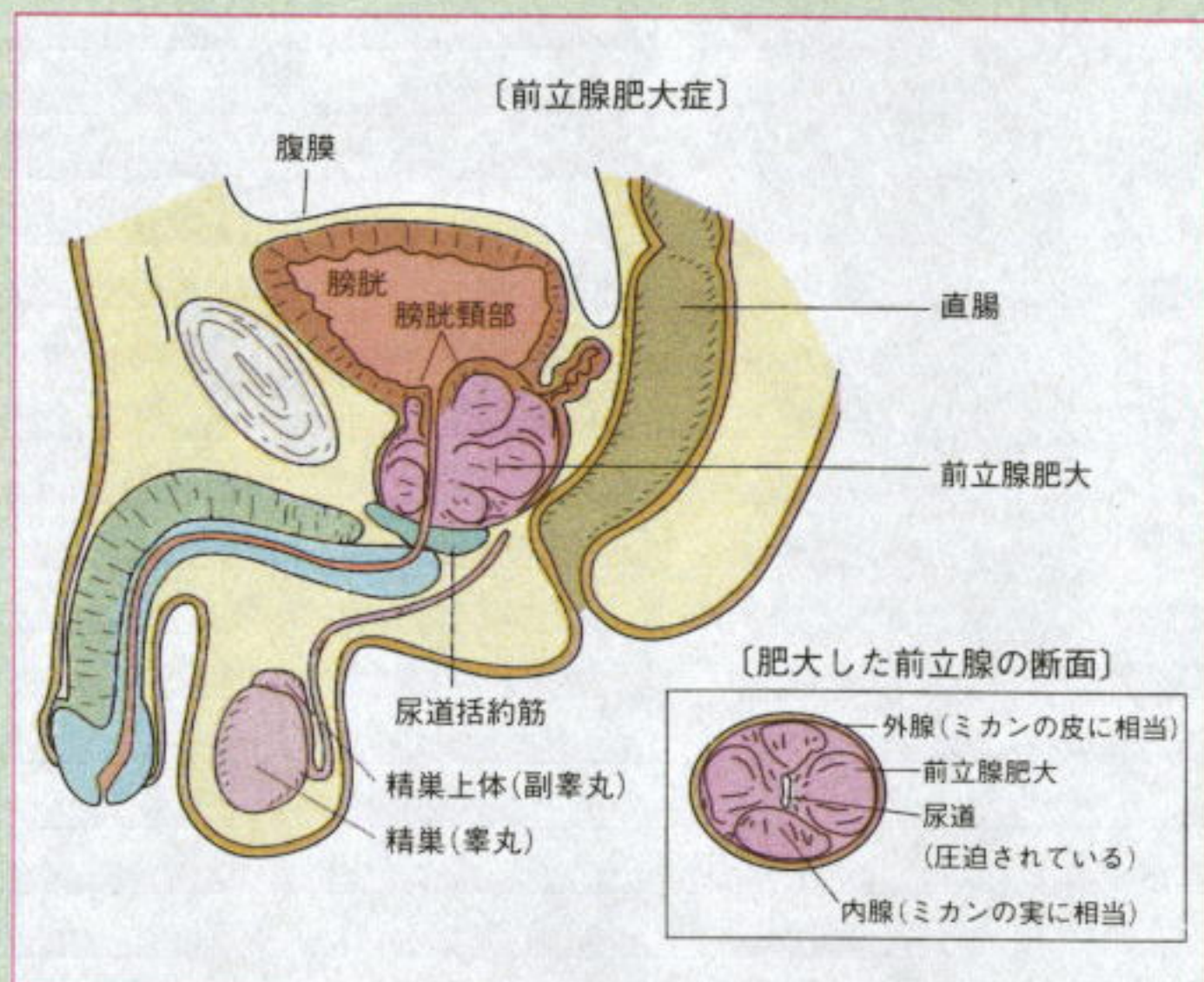


図2 前立腺肥大症